

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大戸小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	次年度に向けて (3月)
思考・判断・表現	年度末評価 (2月)

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「書くこと」 算数 基礎的な知識・技能の向上 <指導上の課題> 個人差が大きく、個に応じた指導の充実や児童の理解を深めるための指導法の工夫改善が必要である。	⇒ 学校や家庭での学習の中でタブレットも含めた問題演習やドリル学習等の時間を確保し、基礎的・基本的な知識・技能の向上に努めていく。(週に1回以上) ⇒ 1人1台端末を活用した児童主体の授業を行い、成果と課題を共有する。授業で得た知識を実生活に活用できるような活動を組み込んでいくことで、より深く定着できるようにする。(単元に1回以上)
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「書くこと」 無回答率の減少 <指導上の課題> 自分の考えを整理したり、伝えたりすることに課題が見られる。児童主体の学習活動の機会を十分に確保する必要がある。	⇒ ICTを効果的に活用し、自分の考えをわかりやすくまとめたり、共有したり、発表したりする活動を取り入れていく。(単元に1回程度) ⇒ 児童が自らの学びを調整し、主体的に学ぼうとする力を育むために、児童にとって必要感のある学習課題や学びの場を設定する。(単元に1回程度)

全国学力・学習状況調査
<小6・中3>(4月～5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等	
思考・判断・表現		結果提供(2月)

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
	知識・技能	思考・判断・表現
知識・技能	どの教科も県の平均を上回る結果となったが、理科では、「エネルギー」を柱とする領域が他の領域に比べて正答率が低く、身の回りの金属の性質や、回路の適切なつなぎ方について正しい知識が身についているかどうかなどを問う問題に課題が見られ、教科を問わずさらなる基礎的・基本的な知識・技能の向上に努める必要がある。 児童質問調査の「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」「分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」における肯定的な回答の割合は90%以上であった。子ども主体の学びとなるような授業を今後も継続していく。	
思考・判断・表現		どの教科も県の平均を上回る結果となったが、国語では、話合いの中の発言を説明したものとして適切なものを選択する問題の正答率が低く、目的や意図に応じて伝える内容を考えることに課題が見られた。算数では「数と計算」領域の分数のたし算について、共通する単位分数(公倍数)を見いたし、分母の違う2つの分数が、共通する単位分数の幾つ分かを記述する問題と、「图形」領域の五角形の面積を求めるために二つの图形に分割し、それぞれの图形の面積の求め方を式や言葉で書く問題の正答率が低かった。問題を正しく理解し、自分の言葉で書くことで課題が見られるので、自分の考えをまとめたり伝えたりする活動を引き続き授業で取り入れていく。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	
思考・判断・表現	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	
知識・技能	B	タブレットを活用した学習活動が習慣化してきている。ICTの活用によって個別に学んだり共働的に学んだりすることができ、発展的な学習にもつなげることができる。結果がすぐに共有できるため、自己の学びを振り返る機会にもなっている。	変更なし
思考・判断・表現	A	自分の考えを記述する活動で評価の観点を示すことで、具体的な課題や目的意識をもって書けるようになってきた。全国学力・学習状況調査における無回答率は県の平均を下回っていた。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)